

# Newsletter 19

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第19号/2011年11月30日発行

## Contents

- 巻頭言 キャンパス都市日吉
- 特集Ⅰ 社会・地域連携セミナー
- 特集Ⅱ 身体知とメディアを通じた多様なリテラシー教育
- 特集Ⅲ カリキュラム研究——半期制と授業評価
- 特集Ⅳ 研究サポート～「研究会助成制度」
- 特集Ⅴ 研究サポート～「研究の現場から」
- 活動報告 ビア・メンター/選書、今年の収穫/日吉行事企画委員会 (HAPP) 秋の実施予定/10周年記念事業を公募します
- 私の〇〇自慢



## キャンパス都市日吉

教養研究センター副所長  
吉田恭子 (文学部)  
Kyoko Yoshida

日吉に着任して11年になります。新任教員オリエンテーションでキャンパスをまわったときちょうど来往舎が建設中で、次年度から研究棟となる巨大な建物を見てそのあまりの立派さに、自分は知らないうちに慶應に魂を売ったのかしら、とほんやり考えました。新しい研究室割り当ての日、年功序列で番号を渡され順番に図面から部屋を選んでいくのですが、わくわくして会場に向かったところ、自分の番になって実は187名中187番であることが判明しました。

今はない旧新研究棟を初めて訪れたのはその前の夏のことでした。お茶をいただいた談話室は、年を経て染みついた学校の匂いが充満していて、初めてなのに懐かしい気がしました。

150周年事業を経て、街道側の日吉キャンパスは訪問者を圧倒するほどきらびやかになりましたが、来往舎南側の緩やかな坂道(上がり)、藤山記念館から塾生会館、あるいは第二校舎から日吉記念館へ歩いていくと、日々の予鈴だけに区切られないキャンパスの時間が流れているかのようです。

2011年7月のはじめ、教養研究センターの支援を受けた朗読授業の総まとめとして、劇作家の松田正隆氏をお招きして開催した朗読劇ワークショップ「都市日記 慶應日吉キャンパス」は、学生たちの先導で真夏のキャンパスを散策することから始まりました。大学生活の入口であり、通過点であり、交友の拠点でもある日吉を舞台に、学生たちは都市にまつわる自作のテキストをキャンパス内の任意のスポットで朗読します。

本番7月5日、観客は来往舎を出発点に学生ガイドの声とキャンパスマップに導かれて歩いていきます。道々、ひとり、ふたりと佇む朗読者の声に私たちは耳を傾けます。夕暮れの独立館は、ちょうど補講期間中で、吹き抜けの階段を上っていくと、ガラス越しに見えるのは蛍光灯に青く照らされる授業風景、暗くひっそりとした無人の教室、そして緩やかにカーブする線路越しに広がる日吉の街並と遠くに赤く灯る鉄塔。朗読者は「キャンパス都市」のさまざまな「街角」に立ち、自らの身体をさらして声を出すことで、キャンパスに流れる時間の一部になると同時に、あたりの空気を振動させ見慣れた風景を揺さ振り、その場にもう少しだけ長く立ち止まるよう人々を招くのです。劇場とは違う開かれた空間で、触れられるほど近くにいる見知らぬ観客を前にひとりひとりが自らの物語を語る——学生たちにとってはとても勇気のいることでした。観客に紛れて彼らの声を「街角」から「街角」へ拾って歩くうち、私は学生たちが身を置くことでこのキャンパスに特別な意味が与えられる瞬間を目撃していると実感しました。そのような日々の時間が層をなしているのが、キャンパス都市日吉なのです。



「都市日記 慶應日吉キャンパス」より